

課題番号: **LS022**
助成額: 104 百万円

ライフ・イノベーション

生物・医学系

平成 23 年 2 月 10 日
～平成 26 年 3 月 31 日

日本の高年初産婦に特化した子育て支援ガイドラインの開発

森 恵美 千葉大学大学院看護学研究科 教授
Emi Mori



専門分野
母性看護学

キーワード
母性・女性看護学／家族看護学／高年初産婦／子育て支援

WEB ページ
<http://www.mamatasu.jp/>

研究背景

日本の高年初産婦(35歳以上)は全出産者の 8.4%(88,312人、2011年)と急増した。高年初産婦は妊娠分娩のリスクが高いが、産後の健康問題は明らかにされていない。産後の身体的心理社会的健康問題を多面的にとらえた研究はほとんどなく、日本においては産後のケアガイドラインもない。

研究目的

最終目的は、高年初産婦に特化した産後1か月までの子育て支援ガイドラインの開発である。高年初産婦の出産後からの健康問題と支援ニーズを詳細に追跡記述し、年齢・初経産を問わない多施設前向きコホート調査研究とシステムティックレビューにより、子育て支援のためのケアガイドラインを開発する。

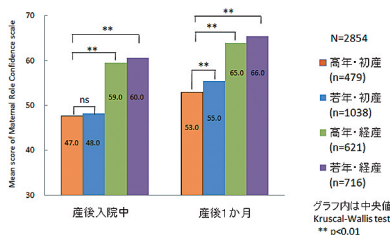
実績

代表論文: Int J Nurs Pract, 20 (Suppl. 1), 20-31, (2014)
新聞: 週刊医学新聞『Medical Tribune』(メディカルトリビューン)「高年初産婦 子育てガイドラインの開発目指す」2011年11月24日号 (Vol.44, No.47)
朝日新聞朝刊「40代出産 身体に負担、ケアの模索」(2013年6月15日)

研究成果

高年初産婦の身体的心理社会的健康問題の解明

コホート調査(2,854名)より、高年初産婦は①経産婦に比べて疲労感が強く、産後うつ病症状があり、②経産婦、若年初産婦に比べて母親役割の自信と満足感、母乳栄養率が低い等が明らかになった。



高年初産婦の母親役割の自信得点が他の群より有意に低いことを示している

産後1か月時の疲労感に関連する要因の特定

高年初産婦 479 名の縦断データを重回帰分析し、産後1か月時の疲労感との関連要因を特定した。産後入院中の疲労感の軽減を図り、母親へのセルフケア等の情報提供、及び退院後の支援が少ない母親へのケアの検討の必要性が示唆された。

変数	Std. β	SE	95%CI
学歴 (大学・大学院卒)	0.099**	0.481	0.473; 2.362
分娩様式	0.023	0.572	-0.729; 1.520
入院時疲労得点	0.320***	0.037	0.257; 0.405
経済的不安感	0.073*	0.508	0.076; 2.073
睡眠充足感	-0.165***	0.510	-3.418; -1.412
わが子中心の生活の難しさ	0.077*	0.513	0.126; 2.141
体力不足感	0.201***	0.555	1.855; 4.038
自分の健康管理の難しさ	0.120**	0.564	0.655; 2.870
自分の子育ての仕方を見直さねばならない	0.087*	0.527	-2.351; -0.278
家事・育児支援への満足感	-0.141***	0.509	-3.033; -1.034
入院日数の充足感	0.081*	0.543	0.229; 2.364

重回帰分析ステップワイズ法 (漸進法) 分娩様式: ln=465 (listwise deletion) R²=0.517
疲労得点は基準点になるほど疲労感が強い。学歴のリファレンスカテゴリ: 中学卒。
睡眠充足感 (不十分=0, 十分=1); 子育ての仕方を見直さねばならない (そう思わない=0, そう思う=1);
家事・育児支援への満足感 (不満足=0, とても満足=1); Std. β 標準化係数, SE 標準誤差, CI 信頼区間. *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001.

重回帰分析による産後1か月時の疲労感の関連要因

2020年の 応用展開

本研究結果は2014年度「産後ケアセンターの整備事業」を加速する根拠となる。開発したケアガイドラインの普及により、看護の質が向上し、高年初産婦や家族からの支援が少

ない褥婦であっても、疲労をためず、産後うつ病を予防し、楽しく自信を持って子育てをするための適切なケアや支援を受けることができる」と期待される。